

# 紀要

# 31

- 前期土偶の根本的性質と展開過程 ……………瀬口 眞司 (1)
- 近江の埴輪棺墓と地域間交流 ……………宮村 誠二 (15)
- 県内出土の木製人形代について ……………中村 智孝 (23)
- 古代中世の規格流通材「へぎ板」を考える ……………横田 洋三 (31)
- 将棋史研究ノート9  
 —飛車と角行の登場— ……………三宅 弘 (38)
- 北朝期・室町期の近江における京極氏権力の形成…北村 圭弘 (47)

# 紀 要

第 31 号

平成 30 年（2018 年）3 月

公益財団法人滋賀県文化財保護協会

## 近江の埴輪棺墓と地域間交流

宮村 誠二

### 1. はじめに

古墳時代の特徴ある墳墓として古くから知られてきたものに埴輪棺墓がある<sup>(1)</sup>。埴輪棺墓は、古墳の周辺につくられた事例が多いことや隣接する古墳を意識して配置されたとみられる事例の存在から、古墳に対する従属性が指摘されており、墳墓の階層構造の中では、木棺墓などとともに相対的下位に位置づけられている（和田1994）。

類例は、西は福岡県から東は福島県まで広範に分布するが、その中心は近畿地方にあり、類例全体の7割以上が集中する（野崎2011）。それゆえ、研究はとくに類例の多い近畿地方中央部（以下、畿内）の事例を中心に進められてきた。これまでに蓄積された研究成果には、個別遺跡の事例分析にとどまらず、当該地域の埴輪棺墓全体を対象とした研究も見られ、いずれも魅力的な結論が導き出されている（田中1997、清家1999、川口2000）。

また、近年は中国地方や四国地方、関東地方といった近畿地方以外の事例研究も精力的に進められている。とくに中国地方や四国地方の事例研究では、埴輪棺墓が畿内との地域間交流や地域間関係を議論するうえで有効な素材となることが示されていて注目される（清家1999、野崎2002・2011、高橋2010、宮村2015、村木2015）。

このように埴輪棺墓は、近年も各地で精力的に研究されており、その成果からは研究の順調な深化が見て取れる。しかしながら、こうした研究動向にあって滋賀県（以下、近江）の事例は類例が少ないことや対象地域が畿内でないことから、先行研究でもあまり検討されておらず、半ば等閑に付されている感すらある。

そこで、本稿では先行研究に学び、近江の事例を対象に埴輪棺墓をめぐる地域間交流について考えてみた。

なお、近江の埴輪棺墓は、遺存状態の悪さや発掘調査報告書未刊のために埴輪棺墓自体の構造が不詳である。資料の検討にあたっては棺材の埴輪に焦点を当てた。

### 2. 近江の埴輪棺墓

近江の埴輪棺墓は、管見では長浜市越前塚遺跡と大津市苗鹿古墳群で各1例が検出されている。

**越前塚遺跡の埴輪棺墓** 越前塚遺跡は、長浜市加納町字越前塚、字狐塚に所在する。当遺跡ではこれまでに発掘調査で50基以上の円形周溝墓や方形周溝墓が検出されているほか、古墳群も検出されている。古墳群は越前塚古墳群と呼ばれ、直径40m以上の円形にめぐる周濠が一部確認され、周囲の状況から前方後円墳の可能性が指摘される越前塚古墳をはじめ、墳丘長33mの前方後円墳である39号墳や墳

丘径12mの1号墳などによって構成されている（長浜市教委1988・1990）。

長浜地域の主要古墳は、長浜平野の東方に南北に連なる横山丘陵の北部から尾根に沿って分布する。これらは長浜古墳群と呼ばれ、墳丘長約100mを測る湖北地域最大の前方後円墳、長浜茶臼山古墳を含む地域を代表する古墳群として知られている。越前塚古墳群は平野部に位置するが、ここでは長浜古墳群に含める。

埴輪棺墓は、越前塚古墳群から南東に約300m離れた地点で検出された。遺存状態が悪く、墳墓構造の詳細は不明である。かろうじて残存していた埴輪棺墓の掘方は、平面形が隅丸長方形を呈する。規模は底部で長辺2.7m、短辺1.55mを測り、検出面からの深さは0.17mであった。埴輪棺は、円筒埴輪2個体が合わせ口に組み合わせられており、残存長1.21m、残存幅0.5mを測る（図1）。

棺材の円筒埴輪は、いずれも貼付口縁を特徴とし、底部高・突帯間隔・口縁部高がほぼ均等に割り付けられたいわゆる古市型の形態を呈すると見られる。外面には器面調整痕としてB種ヨコハケメが認められる。無黒斑の窖窯焼成品である（図2—1・2）（長浜市教委1990）。

なお、類例を概観すると、こうした円筒埴輪は誉田御廟山古墳併行期に最も多く認められるようであり、誉田御廟山古墳が近年の研究で須恵器編年のTK73型式期（小浜2006）やTK216型式期前後（高橋2012）とされていることから本資料についてもTK216型式期を中心とする年代をあてることができる。古墳時代中期中葉である。

**苗鹿古墳群の埴輪棺墓** 苗鹿古墳群は、大津市苗鹿に所在する。比叡山系の支尾根が最も琵琶湖に迫ったところに立地し、これまでに23基の古墳が確認されている。平成7年度に方墳1基と円墳1基が発掘調査され、円墳の周溝から埴輪棺墓が検出されている（安土城考古博2016）。

発掘調査報告書が未刊であり、埴輪棺墓の詳細は不明だが、棺材に使用されていた円筒埴輪は、いわゆる丹後型円筒埴輪の範疇で捉えうるものである。円筒部は3段構成で最上段とその下の段に三角形の透かし孔がある。透かし孔は各段2個で、直交配置されている<sup>(2)</sup>。

本資料は、直交配置の透かし孔をもつことから古墳時代前期後葉以降に位置づけられる（宮村2010）。丹後型円筒埴輪の類例の年代観からは古墳時代前期後葉～中期初頭の年代が想定できよう。

### 3. 越前塚遺跡の埴輪棺墓と地域間交流

前章では、越前塚遺跡と苗鹿古墳群で検出された埴輪棺

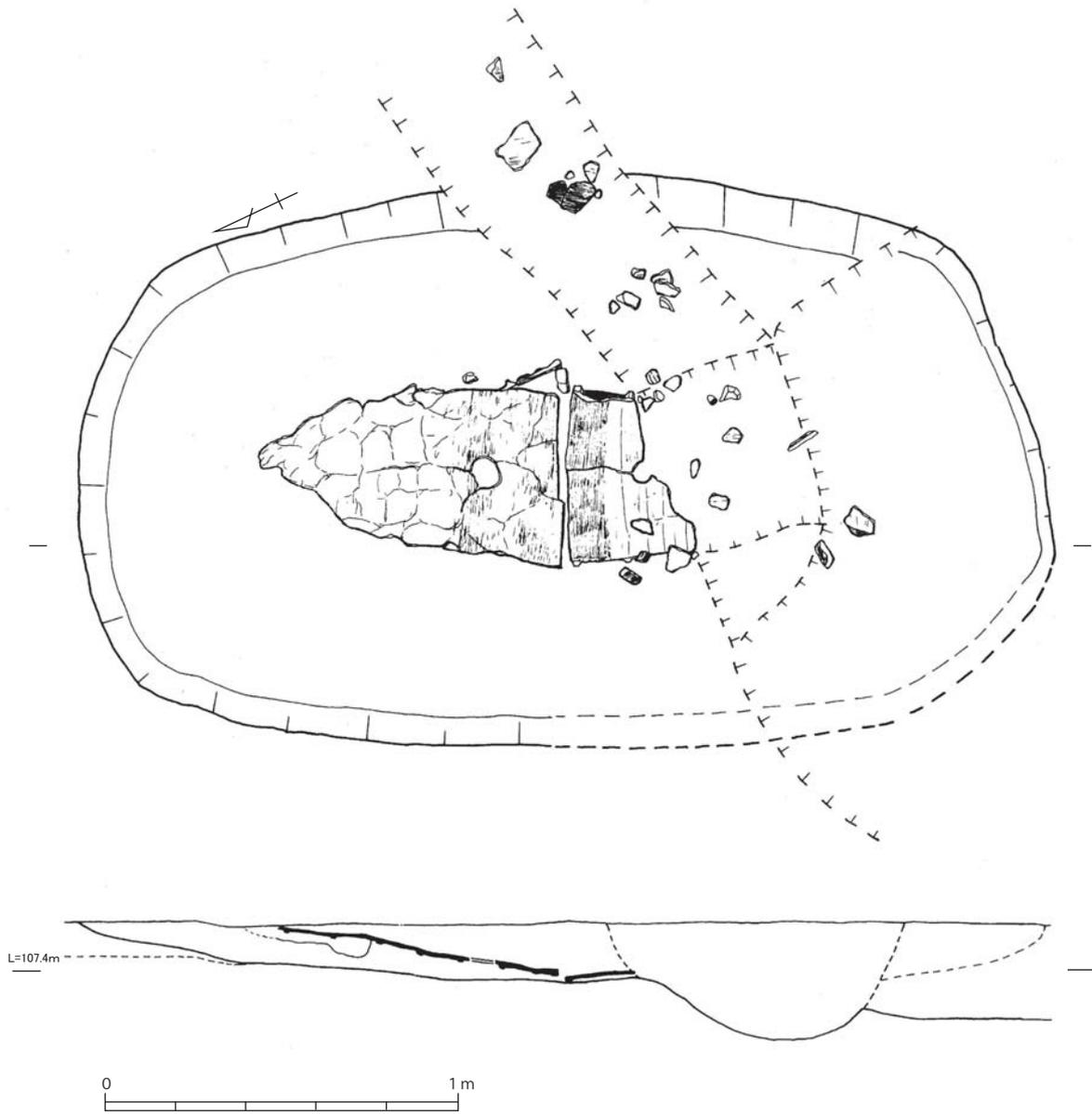


図1 越前塚遺跡の埴輪棺墓（S=1/20）

墓と棺材の埴輪の特徴を示した。

ところで、越前塚遺跡で埴輪棺に使用されていた円筒埴輪をはじめ、長浜古墳群の古墳時代中期の埴輪については従来から畿内の埴輪との関係が指摘されている。

たとえば、高橋克壽氏は、湖北地域での前方後円墳の動態を論じるなかで、5世紀における長浜古墳群の成長の背景に畿内の王権の力が働いていたことを想像させるものとして、越前塚遺跡で出土した埴輪が古市古墳群の埴輪の特徴を非常に色濃く保持している点を指摘している（高橋1995）。また、辻川哲朗氏は、長浜古墳群において古墳時代中期中葉に古市型・貼付口縁・B種ヨコハケ・窖窯焼成技術という諸要素がセットで導入される点に注目し、そこに当該期の埴輪生産の中核地域である古市古墳群からの直

接的な情報伝達があったことを想定している（辻川2003 b・d）。

両氏は、埴輪の特徴から古墳時代中期における長浜古墳群と古市古墳群（ヤマト王権）との緊密な関係を指摘するが、いずれの見解でも越前塚遺跡の埴輪棺は重要な位置を占めるものと思われる。この点は当該埴輪棺墓を考えるうえでも重要なため、以下で検討する。

さて、図3には、辻川氏が注目した古市型・貼付口縁・B種ヨコハケ・窖窯焼成という諸要素をあわせもつ円筒埴輪の主な類例を示した。こうした特徴をもつ円筒埴輪は、古墳時代中期中葉には各地で認められるが、とりわけ畿内に多く、大王墓と考えられる誉田御廟山古墳やその陪塚とされる栗塚古墳、土師の里遺跡など古市古墳群とその周辺

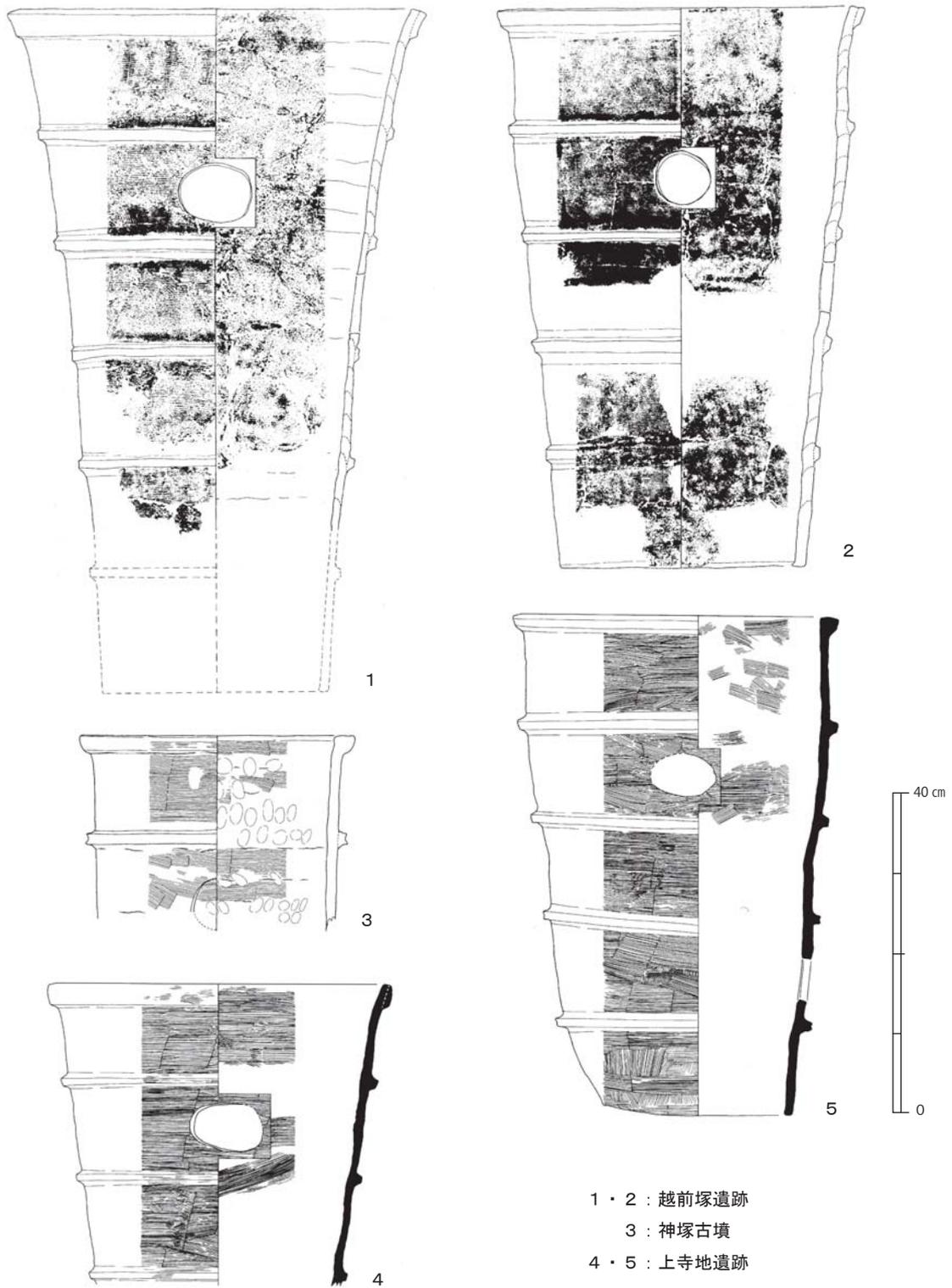


図2 貼付口縁をもつ円筒埴輪①(S=1/8)

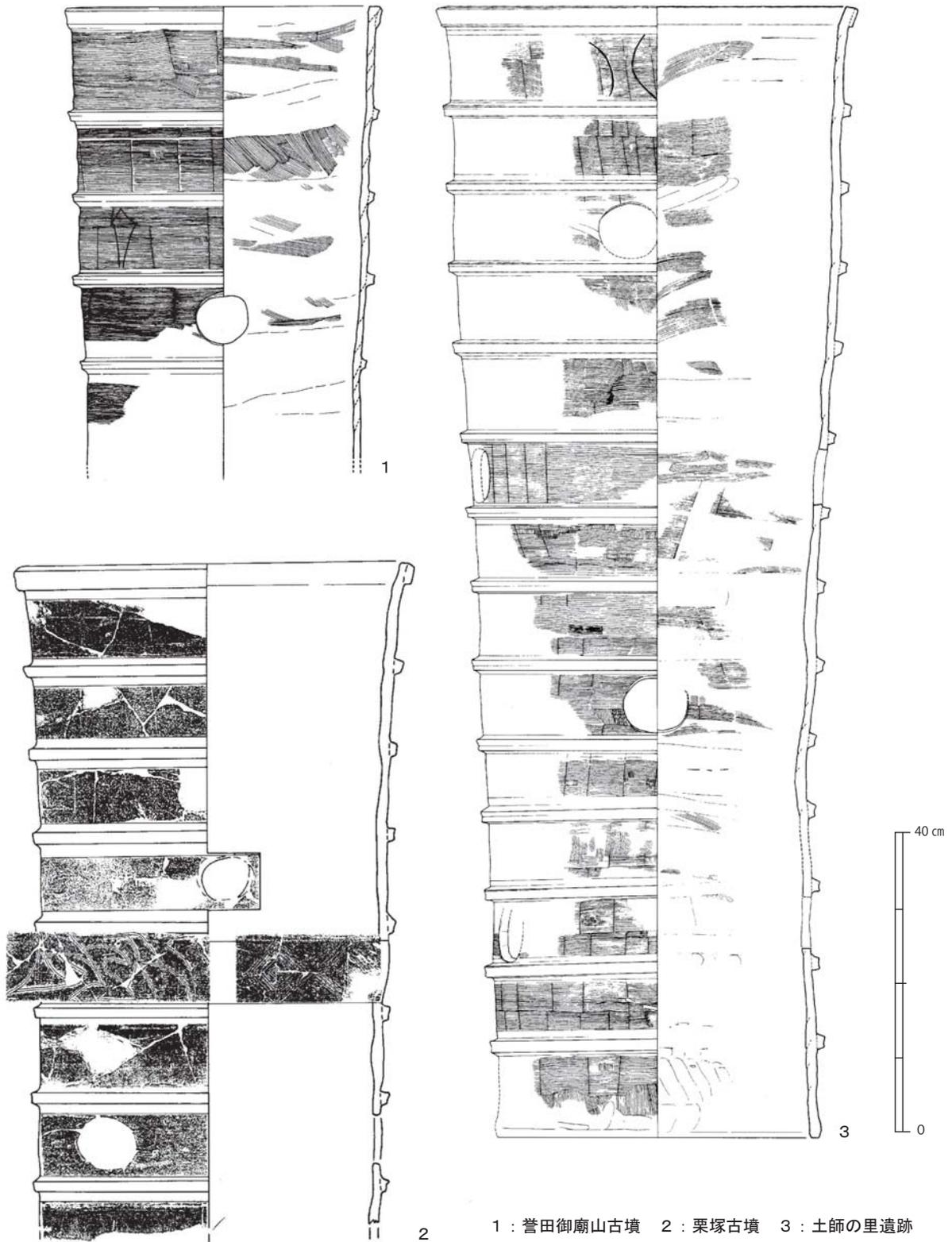


図3 貼付口縁をもつ円筒埴輪②(S=1/8)

で集中的に認められる。同時期では、佐紀古墳群のウワナベ古墳に客体的に存在するほか、城陽市の久津川車塚古墳周辺でも窆窯焼成品ではないものの、貼付口縁の円筒埴輪が出土している。後者が埴輪棺としての検出例である点は興味深い（城陽市1999）。

では、長浜古墳群でのこうした埴輪の存在は何を物語っているのか。それを考える中から、越前塚遺跡の埴輪棺墓を位置づけてみよう。

さて、長浜古墳群の円筒埴輪を詳細に検討した辻川氏の研究（辻川2003d）によれば、当古墳群では早くも古墳時代前期に埴輪が受容される。この時期の資料には、山ヶ鼻古墳例や越前塚古墳周濠出土例がある。これらは近江でも比較的古い時期のものであるが、いずれも断片的な資料であり、様相は判然としない。

古墳時代中期では、窆窯焼成導入以前の資料が現在のところまったく確認されていない。一方、窆窯焼成による資料は越前塚遺跡の埴輪棺をはじめ、比較的多くの類例が知られている。これらはいずれもB種ヨコハケによる外面調整を主体とする。また、神塚古墳例や上寺地遺跡G—134土坑出土例には、越前塚遺跡の埴輪棺と同じく県内での出土例が乏しい貼付口縁を有する円筒埴輪が確認でき（図2-3～5）、当該期の畿内の埴輪の特徴を保持していることが知られる。こうした状況からは、辻川氏も指摘するようにこの段階の埴輪生産が中核地域との直接的な交流によって開始されたことを想定できる。

古墳時代中期末～後期初頭以降には、こうした様相は一変し、垣籠古墳などでは一部尾張型埴輪が採用されるなど重層的なあり方を示す。

以上、長浜古墳群では、古墳時代中期中葉に畿内的な埴輪が導入された後、中期後半には継続的な採用が見られる。こうした埴輪の様相からは、古墳時代中期中葉以降に長浜古墳群造営勢力とヤマト王権との結びつきが強まったことが窺える。その背景を考えるうえで示唆的なのが当古墳群の立地である。すなわち、姉川流域に展開した当古墳群は、琵琶湖から分岐して東海地方や北陸地方へ通じる要衝の地に位置しているのである。このことは埴輪の様相からも窺え、たとえば、古墳時代中期中葉の福井県向山1号墳で尾張系の円筒埴輪が採用されていること（若狭町2016）や、古墳時代中期中葉以降に福井県の松岡古墳群で畿内的な埴輪が継続的に採用されること（浅野2008）は、それぞれ中間に位置する湖北地域を介した若狭と尾張、畿内と越前との交流を考えさせる。さらに、長浜古墳群の古墳時代中期末～後期初頭の首長墓である垣籠古墳で尾張型埴輪が見出されていることも当該地域と尾張との交流を物語るものであろう（辻川2003c）。

日本海側の大型前方後円墳の動態からは、古墳時代中期中葉以降に丹後に代わって若狭が台頭してくる状況を復元できるが、こうした中でヤマト王権は、琵琶湖を介した畿

内と日本海沿岸地域との交通の要衝に位置する長浜古墳群造営勢力との関係強化を図ったことが窺える。そのことは当古墳群が70～100m級の前方後円墳を継続的に築造し、継続的な埴輪生産を実現していることにも反映している。

このように、長浜古墳群での古市型・貼付口縁・B種ヨコハケ・窆窯焼成という諸要素をあわせもつ円筒埴輪の受容には「単なる文化伝播以上の思惑や技術的な関与などが働いた可能性」が想定でき、これらを「王陵系埴輪」（高橋2008）として捉えることができる<sup>(3)</sup>。

王陵系埴輪が棺材とされることは、埴輪棺墓の先行研究でも注意されており、これに基づき畿内と各地との地域間関係や地域間交流のあり方が議論されている（清家1999、高橋2010、野崎2011）。

長浜地域では、年代的に遡る埴輪棺墓が確認されていないことから越前塚遺跡の埴輪棺墓は当該期における畿内との交流を通じて受容されたものと考えられる。埴輪の製作技術だけでなく、埴輪棺墓という墓制をも受容している点で交流のあり様を示すものとしてその存在意義は小さくない。なお、地理的に離れる事例だが、古墳時代中期中葉に埴輪生産の中核地域と同様の規格的な埴輪が窆窯焼成技術とともに受容される状況は出雲や但馬でも確認でき、両地域ではそれと対応して首長墓の築造状況にも変動が生じることが指摘されている（岩本2015）。長浜古墳群での中期中葉段階の埴輪生産は、長浜茶臼山古墳の築造を契機として開始された可能性が指摘されているが（辻川2003d）、当古墳は古墳時代中期中葉以降における前方後円墳の継続的築造の最初に位置づけられるものであり、近江でも出雲や但馬と同様の状況を指摘できるかもしれない。

#### 4. 苗鹿古墳群の埴輪棺墓と地域間交流

越前塚遺跡の埴輪棺墓には、王陵系埴輪が使用されていたが、実は同様な事例が案外多く認められることが資料を検索する中で分かってきた。そこで、各時期の王陵系埴輪と埴輪棺墓との関係を見てみると、古墳時代前期前葉の王陵系埴輪である特殊器台形埴輪を棺材とする事例には、倉敷市の矢部堀越遺跡例と矢部B42号墳例がある。総社市の宮山墳墓群では宮山型特殊器台を転用した棺が検出されており、埴輪棺の祖型である可能性が指摘されている（橋本1980、間壁1995、清家1999）。吉備地域の上記2例の特殊器台形埴輪棺はこれとの関係が考えられよう<sup>(4)</sup>。

古墳時代前期後葉の王陵系埴輪である齊一的な鱗付円筒埴輪では、埴輪棺としての検出例が顕在化してくる。代表的なものとしては、奈良市マエ塚古墳や神戸市舞子浜遺跡、松江市上野1号墳、福岡市鋤崎古墳などの事例を挙げることができる。西本和哉氏の集成によると、鱗付円筒埴輪の出土例は古墳からの出土例が92例あるのに対し、埴輪棺としての検出例は14例あり（西本2008）、とくに山陰地方では、鱗付円筒埴輪が高い割合で埴輪棺に用いられていて注

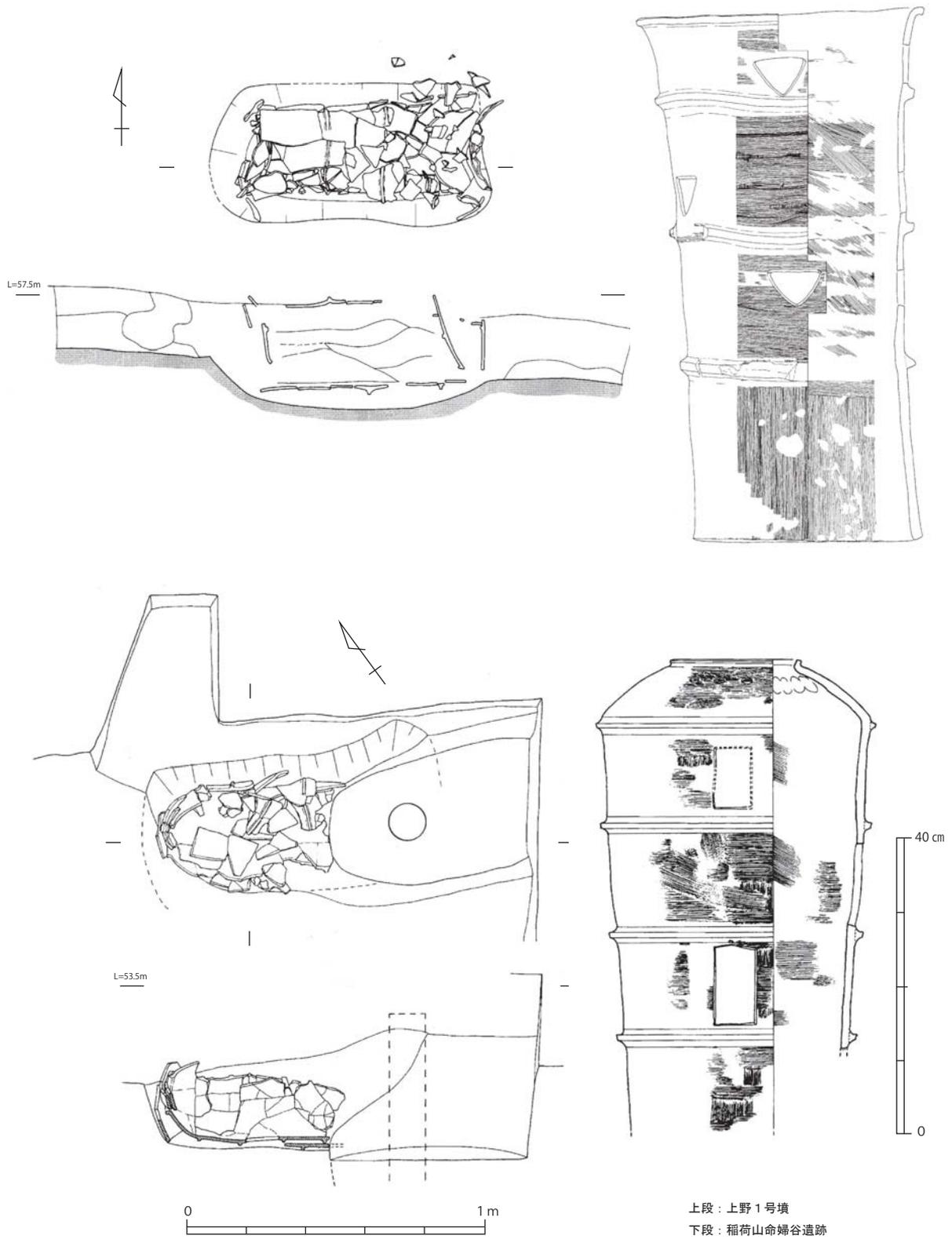


図4 直交配置の透かし孔をもつ円筒埴輪の埴輪棺への転用例（遺構：S=1/20、遺物：S=1/8）

目される（高橋2010、野崎2011）。

また、いちいち例を挙げないが、先に検討した越前塚遺跡の埴輪棺をはじめ、古墳時代中期の王陵系埴輪が棺材とされる例も多い。

なお、近年、関東地方の古墳時代後期の大型円筒埴輪が王陵系埴輪との関係で注目されている（山田2008、日高2014）。埼玉県諏訪山古墳群第7号周溝（伝田ほか2011）や群馬県井出二子山古墳周辺（後藤1953）で5条突帯6段構成の大型円筒埴輪が埴輪棺の棺材とされていたことは、前代からの王陵系埴輪と埴輪棺墓との関係性という脈絡で理解できるかもしれない<sup>(5)</sup>。

以上、各時期の王陵系埴輪と埴輪棺墓との関係を見てきたが、ここで指摘しておきたいことは、筆者が古墳時代前期後葉の政治的中枢地域の埴輪との関係で注目する直交配置の透かし孔をもつ円筒埴輪に埴輪棺としての使用例が目立つことである（宮村2010）。苗鹿古墳群の埴輪棺もまさにそうした事例の一つであった。

今回、筆者が類例を検索したところ、古墳時代前期の直交配置の透かし孔をもつ円筒埴輪は18例を確認でき、このうち7例が埴輪棺としての検出例であった（図4）。比率としては、類例全体の4割弱を占めており、鱈付円筒埴輪の使用例と比べてもすこぶる高い割合である。

古墳時代前期の直交配置の透かし孔をもつ円筒埴輪は、奈良盆地から日本海沿岸地域（丹後や山陰）や東海地方（美濃や尾張）へ抜けるルート上に点々と分布することが指摘されている（東方2014・2015）。詳細は別稿に譲るが、筆者はこうした円筒埴輪が当該期の王権中枢と関係が深い器物と見ており、それを樹立する古墳の造営勢力がこの時期にヤマト王権との結びつきを強めた可能性を想定する。その背景には高句麗の南下による朝鮮半島情勢の緊迫化があったことが推察されるが、丹後型円筒埴輪を棺材とする苗鹿古墳群の埴輪棺は、京都市稲荷山命婦谷遺跡の埴輪棺（宇野2008）などとともに、王権中枢と日本海沿岸地域との交流を物語るものといえよう<sup>(6)</sup>。

かつて、佐藤晃一氏は丹後での埴輪の成立と変遷を論じる中で、丹後から離れた苗鹿古墳群や稲荷山命婦谷遺跡の丹後型円筒埴輪について「形は類似するものの果たしてそれが丹後といかなる関係の下に制作されたのかは今後の課題である」とされたが（佐藤2000）、今回の検討結果からはそれがきわめて政治的な関係であった可能性が指摘でき、そこには東アジア規模での政治動向が反映していることが窺えるのである。

## 5. おわりに

本稿では、これまであまり検討されることのなかった近江の埴輪棺墓を検討し、地域間交流について考えた。

その結果、琵琶湖を挟んだ対岸に位置し、年代的にも隔たりのある2基の埴輪棺墓には、畿内と列島諸地域との交

流の諸相が垣間見え、そこには多分にヤマト王権の政治的意図が働いていることが窺えた。近江が畿内から日本海側や東海に通じる交通の要衝として重要な地域であったことは、すでに多くの先学が論じてきたところであるが、本稿での検討結果もこれを追認するものとなった。

なお、埴輪棺墓には構築年代を絞り込めない事例も多く、本稿のように棺材に使用された埴輪の分析から埴輪棺墓自体の評価を導き出すことには慎重な姿勢が求められる。しかし、越前塚遺跡の埴輪棺に畿内の最新の技術が駆使された王陵系埴輪が使用されていたことや苗鹿古墳群の埴輪棺に未だ近隣で樹立古墳が確認されていない丹後型円筒埴輪が使用されていたことから、埴輪棺の棺材選択にも特別の意味があったことが窺え、こうした議論の素材としても一定の有効性を認めうると考える。

ヤマト王権と諸地域との関係は、古墳を素材として語られることが多いが、本稿ではやや視点を変え、埴輪棺墓からアプローチを試みた。浅学ゆえ先学の業績に拠った部分も多く、論じ残した課題も多い。今後の研究のためにもご教示、ご批判を乞う次第である。

## 註

- (1) 埴輪棺墓には1921年の上原準一氏による事例報告以来、すでに1世紀近い研究史がある。
- (2) 本資料の特徴については、滋賀県立安土城考古博物館の第54回企画展『近江の古墳時代』で確認した。
- (3) 王陵系埴輪とは、『古代文化』の特輯「王陵系埴輪の地域波及と展開」に寄せた一文において高橋克壽氏が暫定的に用いた用語および概念である。氏は王陵系埴輪について「5世紀であれば大王陵を含む古市・百舌鳥の二大古墳群の埴輪を典型とする概念であり、B種横刷毛目を中心とする一連の型式学的連続性を追える円筒埴輪が中心となる。そして、4世紀後半にあつては斉一的な鱈付円筒埴輪が、それ以前であれば特殊器台形埴輪がよく該当する」とし、さらに「それらに加えて家や器財、そして馬や人物などの形象埴輪も時代の標準となるものである」として王陵系埴輪に含めている（高橋2008）。
- (4) なお、天理市中山大塚古墳の発掘成果から、宮山型特殊器台・特殊器台形埴輪・円筒埴輪の3器種が奈良盆地東南部でほぼ同時に成立したという理解が有力視されている（城倉2014）。宮山型特殊器台棺や特殊器台形埴輪棺は、現在のところ吉備地域でしか確認されていないが、その後、埴輪棺墓が畿内を中心に展開することからすれば、埴輪棺墓が大和で創出された可能性も十分想定できる。埴輪棺の祖型や埴輪棺墓の成立地については検討が必要である。
- (5) ただし、関東地方をはじめ、各地の大型円筒埴輪を王陵系埴輪としてとらえることができるかは今後の検討課題である。
- (6) 分布の中心から離れた地域での丹後型円筒埴輪の出土例に埴輪棺としての検出例が目立つことは、山陰地方における鱈付円筒埴輪のあり方とともに興味深い事象である。

挿図典拠

図1～4 各報告書をもとに宮村が作成

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 浅野良治（2008）「北陸における埴輪をもつ古墳」『古代文化』第59巻第4号、財団法人古代学協会
- 岩本 崇（2015）「山陰における古墳時代中期首長墓の展開と「地域圏」の形成—古墳時代中期の地域社会と集団関係—」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』、島根県古代文化センター
- 宇野隆志（2008）「稲荷山命婦谷遺跡出土の埴輪棺」『吾々の考古学』、和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 川口修実（2000）「畿内における埴輪棺の展開についての一試論」『古代学研究』149号、古代学研究会
- 小浜 成（2006）「応神陵古墳の年代観と被葬者像—出土水鳥形埴輪から考える—」『応神大王の時代』、大阪府立近つ飛鳥博物館
- 後藤守一（1953）「上野国愛宕塚」『考古学雑誌』第39巻第1号
- 佐藤晃一（2000）「埴輪の成立と変遷—丹後型円筒埴輪の分布と背景—」『季刊考古学・別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』、雄山閣
- 滋賀県立安土城考古博物館（2016）『近江の古墳時代』
- 城倉正祥（2014）「埴輪」『考古調査ハンドブック10 古墳の見方』、ニューサイエンス社
- 城陽市史編さん委員会（1999）『城陽市史』第三巻、城陽市役所
- 清家 章（1999）「古墳時代周辺埋葬考—畿内の埴輪棺を中心に—」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』、大阪大学考古学研究室
- 高橋克壽（1995）「湖北の後期前方後円墳の動態」『琵琶湖周辺の6世紀を語る』、京都大学文学部考古学研究室
- 高橋克壽（2008）「特輯『王陵系埴輪の地域波及と展開』に寄せて」『古代文化』第59巻第4号、財団法人古代学協会
- 高橋克壽（2010）「山陰の古墳時代前期埴輪の特質」『遠古登攀—遠山昭登君追悼考古学論集—』、『遠古登攀』刊行会
- 高橋克壽（2012）「播磨の大型古墳と畿内政権」『大型古墳からみた播磨』、第12回播磨考古学研究集会実行委員会
- 田中涼子（1997）「円筒棺にみる階層性」『古事』第1冊、天理大学考古学研究室
- 辻川哲朗（2003a）「近江における古墳時代中・後期の円筒埴輪—長浜古墳群・息長古墳群を中心に—」『日継知らずき王無し—継体大王の出現—』、滋賀県立安土城考古博物館
- 辻川哲朗（2003b）「近江地域の円筒埴輪編年」『埴輪論叢』第4号、埴輪検討会
- 辻川哲朗（2003c）「長浜市垣籠古墳の再検討」『考古学に学ぶ（II）』、同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 辻川哲朗（2003d）「長浜古墳群の埴輪」『北近江』創刊号、北近江古代史研究会
- 伝田郁夫・江原昌俊・城倉正祥（2011）「続 比企の埴輪」『埴輪研究会誌』第15号、埴輪研究会
- 長浜市教育委員会（1988）『越前塚遺跡発掘調査報告書—加納工業団地造成関連—』、長浜市埋蔵文化財調査資料第5集
- 長浜市教育委員会（1990）『越前塚遺跡Ⅲ・口分田北遺跡Ⅰ・Ⅱ宮司遺跡Ⅳ・新庄馬場遺跡Ⅰ 大辰巳遺跡Ⅲ』、長浜市埋蔵文化財調査資料第6集
- 西本和哉（2008）「緒付円筒埴輪の分布とその意義」『近畿地方に

- おける大型古墳群の基礎的研究』、奈良大学文学部文化財学科
- 野崎貴博（2002）「埴輪棺墓の群構成—中国地方の事例の検討から—」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』下巻、古代古備研究会
- 野崎貴博（2011）「中四国の埴輪棺と地域間の交流」『埴輪から見た中期古墳の展開』、中国四国前方後円墳研究会
- 橋本博文（1980）「円筒棺と埴輪棺」『古代探叢—滝口宏先生古稀記念考古学論集—』、滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会
- 東方仁史（2014）「埴輪からみた日本海沿岸の地域間関係」『倭の五王と出雲の豪族 ヤマト王権を支えた出雲』、島根県立古代出雲歴史博物館
- 東方仁史（2015）「伯耆における古墳の様相—出雲の隣接地域におけるケーススタディー—」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』、島根県古代文化センター
- 日高 慎（2014）「しもつけの埴輪群像—国分寺甲塚古墳を中心に—」『しもつけの埴輪群像—そのすがたをさぐる—』、栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 間壁霞子（1995）「特殊器台棺と初期円筒棺」『神戸女子大学文学部紀要』28巻第1分冊、神戸女子大学文学部
- 宮村誠二（2010）「東大寺山古墳出土の円筒埴輪」『東大寺山古墳の研究』、東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館
- 宮村誠二（2015）「埼玉県の埴輪棺墓」『研究紀要』第29号、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村木真由（2015）「埴輪棺の被葬者に関する試論—関東地域を中心として—」『駒澤考古』第40号、駒澤大学考古学研究室
- 安川 満（2008）「特殊器台形埴輪にみる畿内と吉備」『古代文化』第59巻第4号、財団法人古代学協会
- 山田俊輔（2008）「上毛野における畿内系埴輪の地域波及と展開」『古代文化』第60巻第1号、財団法人古代学協会
- 花園大学考古学研究室編（2016）『若狭向山1号墳』、福井県若狭町
- 和田晴吾（1994）「古墳築造の諸段階と政治的階層構成—五世紀代の首長制の体制に触れつつ—」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5、名著出版

（みやむら せいじ：調査課 技師）

平成30年（2018年）3月31日

## 紀 要 第 31 号

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会  
520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2  
(TEL) 077-548-9780 / (FAX)077-543-1525  
e-mail: mail@shiga-bunkazai.jp  
<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：マルキ印刷株式会社